ルネサンス美術研究の新しい視座を提示する独創的な研究書

プラートの美術と聖帯崇拝

―都市の象徴としての聖遺物―

かねはら　ゆ　き　こ
金原由紀子 著

これまでのルネサンス研究においては、フィレンツェ、ローマ、ヴェネツィアといった美術制作の中心地のみに関心が向けられてきた。本書では文化的にも政治的にも隣国フィレンツェの影響下にあった小都市プラートにあえて目を向けて、プラートが自治都市としての生き残りを賭けて聖母マリアの聖遺物「聖帯」を都市の象徴として位置付けたプロセスを解明し、プラートの美術作品をその表象として読み解くという極めて独創的な切り口から研究を展開する。同時代史料と豊富な図版を掲載すると共に、社会的・政治的コンテクストから従来の作家研究では解決し得なかった様式、図像、プログラム上の諸問題を解決し、今後のルネサンス美術研究の可能性を広げる新しい視座を提供する。

アニョロ・ガッディ，「聖母被昇天と聖帯の授与」，サクラ･チントラ礼拝堂，サント・ステファノ大聖堂，プラート

2005年1月10日刊行

■体裁 B５判上製函入 口絵12頁 本文336頁 挿図148点

■定価 26,250円（本体25,000円）

中央公論美術出版
http://www.chukobi.co.jp
〒104-0031　東京都中央区京橋2-8-7
電話　03-3561-5993　FAX　03-3561-5834

お取扱いは

目　　次

はじめに

序／研究史

第Ⅰ部　プラートの聖帯崇拝と「聖母被昇天と聖帯の授与」

第１章　プラートのコムーネの成立と発展

第１節　プラートのコムーネの成立／第２節　グエルフィとギベリーニの抗争の時代／第３節　フィレンツェによる干渉と独立の危機

第２章　聖帯崇拝の成立と展開

第１節　12～13世紀のサント・ステファノ聖堂／第２節　聖帯崇拝の成立年代と成立要因／第３節　聖帯崇拝の発展とコムーネの関与

第３章　聖帯の伝説とテキスト

第１節　聖帯と「歴史」のテキスト／第２節　聖帯の「歴史」／第３節　ドゥッチオ・ディ・アマドーレの『聖帯』とコムーネ

第４章　都市の象徴としての「聖母被昇天と聖帯の授与」

第１節　イタリアにおける「聖母被昇天と聖帯の授与」の図像／第２節「聖母被昇天と聖帯の授与」のフィレンツェ型図像

第Ⅱ部　サント・ステファノ聖堂の 14世紀後半～15世紀前半の装飾

第１章　サクラ・チントラ礼拝堂の壁画装飾

第１節　アニョロ・ガッディの聖母伝／第２節　アニョロ・ガッディの聖帯伝と様式の問題

第２章　聖遺物顕示のための外部説教壇

第１節　ドナテッロ以前の外部説教壇／第２節　ドナテッロによる外部説教壇の建設の経緯と図案の変更／第３節　聖帯の顕示の場としての外部説教壇

第３章　主要礼拝堂の装飾プログラム

第１節　主要礼拝堂の装飾の経緯と主題選択／第２節　フィリッポ・リッピによる場面選択と連続説話の手法／第３節　主要礼拝堂の装飾プログラムにおけるステンドグラスの役割

結　語

資料集　聖帯の伝説のテキスト

資料１. 偽アリマタヤのヨセフ『聖母マリアの帰天について』

資料２. ビアンキーニ版

資料３. ガッレッティ版『プラートの聖母マリアの帯の歴史』

資料４. ドゥッチオ・ディ・アマドーレ『聖帯』

巻末資料／文献目録／図版一覧／あとがき／年表／索引

著者略歴

金原由紀子（かねはら・ゆきこ）

1993～1999年　お茶の水女子大学大学院博士課程人間文化研究科比較文化学（美術史）専攻

1996～1998年　フィレンツェ大学文哲学部留学

1999～2001年　お茶の水女子大学文教育学部人文科学科教務補佐員

2001年　お茶の水女子大学大学院人間文化研究科にて博士号取得

2002年～　成城大学、尚美学園大学、芝浦工業大学、明治学院大学非常勤講師

刊行のことば

プラートの美術と聖帯崇拝という研究テーマを抱えて渡伊して以来、イタリア人は言うまでもなく、日本人の友人からも、「どうしてプラートなのか？」という質問を度々受ける。この問いには、初期ルネサンスの作品を扱いながらもなぜ聖遺物崇拝という中世的な現象を問題とするのか、フィレンツェ芸術家の作品を論じながらもどうしてひなびた小都市プラートにこだわるのか、といった意味が暗に含まれている。

こうしたテーマ設定にたどり着くまでには、思い返せばいくつもの偶然の積み重ねがあった。とりわけ、中学時代から愛読していた故辻邦生氏の長編小説『春の戴冠』をきっかけとして、美術史を専攻することに決めた学部３年時に、辻佐保子先生が研究室にいらしたという幸運は大きい。最初にボッティチェッリ、続いてフィリッポ・リッピと初期ルネサンス絵画の勉学を進めたものの、聖遺物崇拝や奇蹟譚といったキリスト教中世のメンタリティが、自分でも気づかぬままに歴史理解の基盤として刷り込まれた。大学院ではサント・ステファノ大聖堂主要礼拝堂のフィリッポ・リッピの壁画に続き、アニョロ・ガッディの壁画について考察を進めたが、ほどなくして、プラートの聖帯崇拝とその伝説に強く惹かれるようになった。中世美術の専門家の指導でルネサンス美術を研究するという、やや変則的な状況に慣れきっていた著者にとって、プラートの聖遺物崇拝を作品分析の視点として持ち込むことは、実のところごく自然な発想だったのである。

しかしながら、トスカーナの聖遺物崇拝や聖者崇拝が都市の愛郷心や政治と深く結びついたものであったということを、ようやく肌で理解できるようになったのは、1996～98年のフィレンツェ留学時であった。ピサの散策中に偶然通りかかった工事現場では「ルッカ・メルダ（ルッカ糞ったれ）」、ピストイアの町はずれの倉庫の壁には「プラート・メルダ」というスプレーの落書きを見つけ、都市同士の競争心が連綿と現代にまで続くことを実感した。1999年9月8日に聖帯の顕示を見に行った折には、百合の紋章の旗を掲げるフィレンツェの旗手が大聖堂に進む様子を見ていたプラート住民たちが、「俺たちはフィレンツェ人じゃない、プラート人なんだ！」と口々に言い合うのを耳にした。また、フィレンツェに間借りしていたアパートの前のスタディアムでは、隔週ごとに都市対抗の「戦争」としてのサッカー試合が繰り広げられるのを目の当たりにした。強豪チームとの試合前は、地元フィオレンティーナのチーム・カラーである紫色のマフラーを身につけていないと、身に危険が及びかねない程の熱狂ぶりであった。こうした様々な体験と偶然、多くの方々の助力があって、またおそらくは聖帯のご加護もあって、およそ10年の研究成果が本書となったわけである。